様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００８６４

研究課題名（和文）英語ライティングタスクの開発に向けたＥＡＰジャンルの横断的分析

研究課題名（英文）Cross-genre analysis for developing EAP writing tasks

研究代表者
マスワナ　紗矢子（Maswana, Sayako）

東京理科大学・基礎工学部教養・准教授

研究者番号：６０６０８９３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、大学生にとって重要なEAPジャンルを対象に、言語的特徴と修辞構造に焦点をあてた横断的分析を行い、その結果に基づいて体系的に英語ライティングを学ぶためのタスクを開発した。また、分析結果を用いてジャンル間の共通性に注目したジャンルの理論的枠組みを提案した。日本のEAP教育の文脈を考慮したEAPライティング能力指標やルーブリックも検討し、タスクと合わせてライティング指導に応用できるようにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学生の幅広い英語学習のニーズを考慮すると、多様なジャンルに対応が可能な、体系的で効率的な EAPライティング教育が必要である。本研究は、複数のEAPジャンル間に共通する言語的・修辞的特徴を明らかにし、開発されたタスクを通して大学英語教育に貢献するものである。また、研究結果に基づき、各ジャンルを理論的にも有機的につなげる枠組みを提案していることから、学術的に高い意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In the present research, we conducted a cross analysis of EAP writing genres, using EAP genres that are important for college students, with a focus on linguistic features and rhetorical structures. Based on the results of the analysis, we developed systematic tasks for learning English academic writing. The results of the analysis were also used to propose a theoretical framework of genres, focusing on their commonalities. Taking into account the context of EAP education in Japan, we also developed and proposed EAP writing competency descriptors and rubrics for writing instruction to complement the tasks.

研究分野：英語教育

キーワード：学術目的の英語　ライティング　ジャンル　タスク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

大学の英語ライティング教育では、ジャンルに基づくアプローチが注目されている。とりわけ、EAP（English for Academic Purposes：学術目的の英語）に関連するジャンル（以下 EAP ジャンル）の研究が行われ、教育に応用されている。EAP のライティングにかかわるジャンルとして、発表要旨、書評、研究計画書、修士論文、学術論文などが挙げられる。重要度と難易度の観点から、学術論文については数多くの研究や指導がなされてきた。一方で、各ジャンルは専門分野と密接に関連して独立した特徴を持つとされ、ライティング指導においては、個別に扱われることが多い。学生の将来のニーズを考慮すると、多様なジャンルに対応が可能な、体系的で効率的な EAP ライティング教育が有益である。

EAP を含む特定目的の英語（English for Specific Purposes：ESP）研究の中核をなす「ジャンル」には、それぞれ明確な境界線は存在しておらず、言語的特徴についても、特定ジャンルのみに特有とは言えない。近年注目されている EAP ライティング指導においては、ジャンルおよび専門分野の特殊性（specificity）が重要であるとされている（e.g. Hyland, 2002）が、実際には各ジャンルについて授業を展開できる環境は限られている。また、ジャンル自体が変化に富み、単一分野内でも多様な言語使用が見られる場合も多い。ジャンルのみならず、「分野」の境界線も明確でない場合も散見する。こうした背景を踏まえると、特定ジャンルの特定分野での特徴を見極めることも重要ではあるが、ジャンル間で共通している部分を解明することが、幅広い学生を対象とした EAP ライティング教育には有用であると考える。先行研究の中には、複数のジャンルが互いに関係し合っているというジャンル・システムの枠組みを用いた研究があり、ジャンルのハイブリッド性も指摘されている。例えば Bazerman（1994）は、特許申請プロセスのジャンル・システムを検討し、各ジャンルの関連性を示している。関連するジャンルと専門分野についての実証研究も数少ないが存在するが、これらの先行研究では、限定されたジャンルと分野に焦点をあてた考察になっている。EAP ライティング教育といった大局的な観点からの分析を行い、EAP ジャンル間で共通する言語的・修辞的特徴に基づくタスク開発が求められている。

２．研究の目的

(1) 包括的なジャンル分析

本研究のジャンル分析では、主に従来の分析方法（e.g. Maswana et al., 2015）を採用するが、幅広い観点からの包括的なアプローチをとる。具体的には、語彙やヘッジといった言語的側面と、ムーブという修辞単位を用いた構造面双方からの分析に加え、ジャンルおよび専門分野の横断的分析を行う。理系・文系といったすでに確立された分野区分を基本としつつも、近年需要が高まっている学際的分野のテクストも分析対象とする。分野の違いを考慮しながらも、EAP ジャンル間に存在する連続性に注目して幅広いジャンルを横断的に EAP 教育で扱うことにより、ジャンルへの意識が高まることが期待できる。

(2) 体系的なライティング教育に向けてのタスク開発

大学の英語ライティング教育では、多くの場合パラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティングが指導されている。これらも一つの EAP ジャンルと捉えることができる。効果的に EAP ライティングを学ぶためには、個々の EAP ジャンルを独立したものとして個別に扱うのではなく、共通概念を持つものとして統合することにより、効率的に異なるジャンルに対応できる能力を身に着けることができると考える。本研究での結果を用いて、複数のジャンルに共通する特徴を優先的に学習し、周辺的な特徴は選択的に学ぶといった、学習順序と内容を示し、それに対応したタスクを提案する。

(3) ジャンル概念の再検討

ジャンルの概念の説明を試みた研究は多くあるが、ジャンルの定義自体が難しく、ジャンルやそこでの言語使用は常に進化し流動的であるともいわれている。本研究は、日本の大学英語教育という文脈において、EAP ジャンルの重なりを検討する。EAP の下位概念である EGAP（English for General Academic Purposes：一般学術目的の英語）と ESAP（English for Specific Academic Purposes：特定学術目的の英語）という枠組みを用いて、EAP ジャンルを位置づけ、教育内容や方法において各ジャンルを有機的につなげるモデルを提案する。

３．研究の方法

はじめに、EAP ジャンル特定のために、先行研究の整理と並行して、専門家に対する聞き取り調査を行い、大学生が必要とするジャンルやニーズを分析し、各分野でのジャンルに関する慣習や文化について検討した。調査結果に基づき、EAP ジャンルテクストを収集して EAP ジャンルコーパスを構築した。コーパスの規模は、研究代表者が実際にテクストを読み、修辞構造や表現の使用を確認できる数とした。以前の研究で扱った分野（経済学、医学、工学）および社会科学系の学際分野を対象とした。次に、ジャンル分析について、先行研究を参照して言語的側面と修辞的

側面から項目を作成し、予備分析を行った。予備調査の結果に基づきジャンル分析の項目作成を完了し、収集したすべてのジャンルテクストに対して対象分野の専門家の助言を適宜仰ぎながら分析を行った。抽出された分析結果に対して、ジャンル間のみならず、分野間での類似点と相違点からの考察を加えた。また、EAP ジャンルの共通項をより明確にするために、EGP テクストとの比較分析を試みた。

ジャンル分析結果をモデル化および可視化し、分かりやすい形での提示を検討した。最後に、日本の EAP 教育の環境について考察し、どのような内容をどの順序で学習すべきかといった教育的示唆を導出し、それらの内容を習得するためのタスクを提案した。

４．研究成果

分析対象となる EAP ジャンルをエッセイ・発表要旨・論文・論文要旨とした。EAP ジャンルとして学術論文と発表要旨のみならず、EAP ジャンルの入り口とも考えられる大学のエッセイ（学生の授業課題エッセイおよび教科書のモデルエッセイ）、そして近年比較的多く採用されている日本語修士論文の英文要旨についても分析対象に含めた。それらのテクストを収集して EAP ジャンルコーパスを構築した。分野については、以前研究代表者が扱った分野に応用言語学と天体物理学を加え、分析項目には研究の位置づけや意義といった、EAP ジャンルで重要とされる修辞目的を加えて関係する表現を抽出した。

分野では特に ICT 分野を取り上げ、当該分野の学術論文において執筆が困難とされるディスカッションセクションについて、以前使用した枠組みとは異なるディスカッションに特化した Peacock（2002）のムーブモデルを参照した。その結果、中心となるムーブのパターンが抽出され、社会的示唆に言及するムーブが必須であることが明らかになったものの、当該モデルが応用できない論文も存在した。分析結果について ICT 分野の専門家に聞き取りを行い、学際分野の修辞構造についてさらなる考察を加えた。

ジャンル分析および専門家への調査から、修辞構造や表現の分析に加えて、近年顕著にみられる論文での略語使用についての分析が必要であると判断した。略語使用の目的と略語の生成方法の観点から、コーパスに収められた論文を分析し、分野間での相違を明らかにした。具体的には、天体物理学、応用言語学、医学の論文の略語使用について、それぞれの分野の特性を反映した略語の生成方法や、使用頻度および使用箇所を含む論文での使用慣習が明らかになり、アカデミックライティング指導に示唆を与えるものであった。

EAP ジャンルの共通項をより明確にするため、EGP ライティングのテクストとして高校生の自由英作文を比較分析に用いた。EGP と EAP ジャンルの比較においては、修辞構造や語彙だけでなく、人称代名詞、ヘッジ、文献資料の使い方なども分析項目に含めた。顕著に違いが見られた修辞構造や人称代名詞などに注意し、さらに現在高校と大学で使用されているライティング教材の調査を行った上で、ジャンル間の円滑な移行を意識したアカデミックライティングのタスクを含む教科書を作成した。当該ライティング教材について、英語教員からのフィードバックを受けて効果の検証を行った。

また、タスク開発において EAP ジャンルのライティング指標が必要となり、指標プロトタイプを開発した。対象ジャンルは、論文や学会発表に含まれる要旨とし、既存の Can-do 記述文とライティング指標、そして当該ジャンルの先行研究から関連項目を抽出後、EAP 教員への聞き取り調査を行った。その結果、一般英語（EGP）の知識と技能、一般学術英語（EGAP）の知識と技能、ジャンルの知識、専門分野の慣習、という４つのカテゴリーからなるディスクリプターを作成した。さらに、EAP 教員に必要なスキルや支援資料についての研究を参照し、文脈を考慮した EAP ライティングタスクの検討を行った。ライティング指標に基づいたルーブリックを作成し、特に同一ジャンル内での段階性に焦点をあてて、ルーブリックを用いたタスク開発を提示した。EAP ジャンルライティングに特有のムーブ知識、専門分野における研究の位置づけや批判的思考能力などから成る複合的な、学生が習得すべきコンピテンシー項目を可視化した。

以上の結果をまとめ、EAP ジャンルの理論モデル構築を目指して、システムアプローチを援用しながら EAP ジャンルテクストの機能・修辞・語彙的特徴にみられるジャンルの連続性に焦点をあてたモデルを提案した。

＜引用文献＞

①Bazerman, C. (1994). Systems of genres and the enactment of social intentions. In A. Freedman & P. Medway (Eds.), *Genre and the new rhetoric* (pp. 79-101). London: Taylor & Francis.

②Hyland, K. (2002). Specificity revisited: How far should we go now? *English for Specific Purposes, 21*(4), 385-395.

③Maswana, S., Kanamaru, T., & Tajino, A. (2015). Move analysis of research articles across five engineering fields: What they share and what they do not. *Ampersand,2*, 1-11.

④Peacock, M.(2002). Communicative moves in the discussion section of research articles. *System,30*(4),479-497.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，飯島優雅，渡辺敦子，高橋幸，金丸敏幸，寺内一，田地野彰	４．巻 3
２．論文標題 EAP教員コンピテンシー枠組みと教員養成コース―英国の取り組み―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	６．最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，田地野彰	４．巻 2
２．論文標題 日本の英語学習者を対象としたEAPライティング教材研究―EGPからEAPへの接続に注目して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	６．最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Maswana, S., & Watari, H.
２．発表標題 A preliminary study on EAP genre writing-competency descriptors for Japanese science students
３．学会等名 55th RELC International Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，飯島優雅，渡辺敦子，高橋幸，金丸敏幸，寺内一，田地野彰
２．発表標題 EAP教員コンピテンシー枠組みと教員養成コース―英国の取り組み―
３．学会等名 第3回JAAL in JACET学術交流集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 マスワナ紗矢子，加藤由崇，渡寛法，山田浩，田地野彰
２．発表標題 高大接続を目指した英語アカデミックライティング教材の開発
３．学会等名 第3回JAAL in JACET学術交流集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Maswana, S., & Cheng, J. W.
２．発表標題 An analysis of information and communications technologies research articles: A focus on the discussion section
３．学会等名 2019 ALAK International Conference & The 6th East Asia AILA Symposium（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 マスワナ紗矢子
２．発表標題 英語ライティング教育の高大接続
３．学会等名 2019年度目白大学言語文化研究科第2回講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Maswana, S., & Terauchi, H.
２．発表標題 A genre systems approach to academic writing
３．学会等名 2018 ALAK International Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maswana, S., & Watari, H.
２．発表標題 Analysis of the use of acronyms in research articles
３．学会等名 2nd International Conference on English Across the Curriculum（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 マスワナ紗矢子，加藤由崇，渡寛法，山田浩，田地野彰	４．発行年 2020年
２．出版社 朝日出版社	５．総ページ数 88
３．書名 はじめてのアカデミックライティング―A guide to English academic writing for beginners	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関